

カバヤ食品、オハヨー乳業を中核とするカバヤ・オハヨーグループは4月、「日本カバヤ・オハヨーホールディングス」(HD、岡山市北区駅元町)を設立し

て持ち株会社制に移行した。先頭に立って企業経営・業務改善を進める野津基弘社長(44)に狙いや今後の展望などを聞いた。(橋本直樹)

日本カバヤ・オハヨーHD 野津基弘社長に聞く

―持ち株会社設立の狙いは。

「企業を人に例えるなら、業績(損益計算書)は体調を、資産(借対照表)は体質を表している。経営は体調に目が向きがちだが、健康な体質があれば不測の事態にも対応でき、成長の可能性は広がります。そこでHDを設立し、HDはグループの戦略と方向性を示すとともに資産構築を担って体質をより強靱にし、各事業会社は自らの企業価値をより高めるという役割を明確にしました。そしてHDが何より大切にしているのは、人と人の連携・連動を生み出していききたいということです」

―グループの「存在目的」と「経営方針」を策定した。「これまで当グループには企業経営の『軸』



のづ・もとひろ 1997年、オハヨー乳業入社。2014年8月からオハヨー乳業、カバヤ食品などの副社長、15年6月から社長。16年4月から日本カバヤ・オハヨーホールディングス社長を兼ねる。米ザ・オックスフォードアカデミー卒。岡山市出身。

グループの役割明確化

人材育成し地域に貢献

となるものがなかった。新体制移行に当たって、面などを洗い出し、グループ(副社長時代の)21の存在目的と経営方針を策定しました。経営も表れ始めています。月かけて約2800人に『軸』を持つことで目的が明確になり、従業員との全従業員と面談し、各事業会社が抱える課題の意識改革も図れる。商

品開発などの議論が活発化し、新しいアイデアが出るようになった成果がフルに力を発揮できるよう働き方を見直していただきます。感動していただく商品やサービスを生み出すため、社内でも、社外でも、ステークホルダー・消費者に対する使命でもあり、ジャージャー牛は岡山県にとってもオハヨー乳業にとって

も大切。その品質と希少性の高い乳を使用させていただいている供給元のバヤや岡山情報ビジネス学院の事業は圧倒的な業績を上げています。マーケティングへの日頃利益と価値を提供させていたが、わが国に挑戦して構わないことを目指しています。具体的には、一人一人が自分の可能性を高め、成長できる環境を整えます。そしてHDの社名に『日本』の2文字を冠したように、誇りを持って海外でも通用するものづくりやサービスを生み出していきたい。われわれは食品・住宅・教育・レジャーなど多様な事業を展開しており、岡山から日本を超え、世界を舞台に仕事をしたいと思う学生を積極的に採用します。突き抜けた人、突き抜けた仕事をしたい。お客様に喜んでいただく。お客様の健康と、スポーツを始める人、地域に貢献したい。最大の誇りになることを目指しています」